

京都^{de}冬の大学トーク

モノが語る歴史 —今をときめく考古の世界—

つい現代の価値観で過去を見てしまう私たちは歴史観を固定的に語りがちですが、しかし一つの「モノ」がみつかっただけでその認識が塗り替えられる——こうした経験もまた私たちは何度も味わっています。

私たちの固定観念がくつがえされるとき、常識を揺さぶるある種神秘的なロマンと人の豊かな営みを感じます。考古学はモノを見つめモノから歴史を問い直す学問です。その来歴に耳を傾けると、埋もれていた驚くべき歴史が姿を現します。歴史観そのものが問われるいま、もういちどモノに耳を傾け、私たちがどう生きてきたのか、どれほど深い交わりを人は営んできたのかに思いを馳せてみてはいかがでしょうか？

今回の「京都 de 冬の大学トーク」は考古の宝庫でもある京都の地から、考古学がいかに関世界の歴史を紡ぎつないできたのかを考えたいと思います。同時代のつながりが私たちの想像を超えて広がりゆく様子を、若き研究者の二人が描き出します。

演題

講演1：考古学がくつがえすガンダーラ美術の常識

内記理（京都大学助教）

講演2：古墳時代の金工職人はどこからやってきたのか

金宇大（滋賀県立大学准教授）

コメント：「世界」をつなぐ考古学

吉井秀夫（京都大学教授）

日時：2019年11月29日（金）18時30分～20時30分（開場18時10分）

会場：京都大学文学部新館第6講義室（2F）

定員：80名（要事前申込。申込多数の場合は抽選とさせていただきます）

主催：京都大学、京都大学学術出版会、文学研究科附属文化遺産学・人文知連携センター

後援：読売新聞社、活字文化推進会議





大学と社会が拓く未来の知について

日本のフィールド科学の祖とされる今西錦司博士が『生物の世界』を著して、すべての生物に社会があると宣言したのは、1941年、39歳のことでした。当時、ヒトとヒト以外を同列に扱うことは欧米の学界から強い批判を浴びました。しかし人文科学と自然科学との垣根を取り払い、人間中心の世界観を覆した日本の学術は、今や、様々な分野で世界をリードしています。地球規模、あるいは生命史・人類史の長さを見据えて解決すべき問題に私たちが直面する今日、若き日の今西錦司が挑戦したように、今、京都大学の研究者は、未来を拓くための様々な研究に勤しんでいます。週末の一時、こうした研究者を囲んで、歴史と未来を大いに語ってみませんか。



内記理 ◆ないき さとし

京都大学大学院文学研究科附属文化遺産学・人文知連携センター助教

1985年岐阜県生まれ。京都大学大学院文学研究科博士後期課程修了。京都大学博士(文学)。著書に、『ガンダーラ彫刻と仏教』(京都大学学術出版会、第6回三島海雲学術賞受賞(2017年))などがある。



金宇大 ◆きむ うだい

滋賀県立大学人間文化学部准教授

1983年兵庫県生まれ。京都大学大学院文学研究科博士後期課程修了。京都大学博士(文学)。(独)国立文化財機構奈良文化財研究所アソシエイトフェロー、京都大学白眉センター特定助教を経て現在に至る。著書に、『金工品から読む古代朝鮮と倭——新しい地域関係史へ』(京都大学学術出版会、第1回高麗澄雄記念渡来文化大賞渡来文化研究奨励賞受賞(2019年))などがある。



吉井秀夫 ◆よしひ ひでお

京都大学大学院文学研究科教授

1964年兵庫県生まれ。京都大学大学院文学研究科博士後期課程中途退学。京都大学文学部助手、立命館大学文学部専任講師・助教授などを経て現在に至る。著書に、『古代朝鮮 墳墓にみる国家形成』(京都大学学術出版会)などがある。第27回濱田青陵賞受賞(2014年)。

申し込み方法

事前申し込みが必要です。Eメールで京都大学学術出版会 シンポジウム掛までお申し込みください。その際、講演会参加希望・氏名(ふりがな)・年齢・職業・住所・郵便番号・電話番号・メールアドレスをお知らせください。お申し込みが多数の場合、抽選を行います。原則として11月22日(金)までに、ご登録いただいたメールアドレスに抽選結果をお送りいたします。11月22日を過ぎてもメールが届かない場合は、誠にお手数ですが、事務局までご連絡下さい。

〒606-8315 京都市左京区吉田近衛町 69番地 京都大学吉田南構内
京都大学学術出版会 シンポジウム掛
TEL: 075-761-6182 Email: sympo@kyoto-up.or.jp

